

## (2) 授業実践

### 授業実践⑨

## 第3学年 音楽科「ぼく・わたしの日本のふし」

実 施 平成26年1月

対 象 3年うめ組 31名

授業者 角町 美穂

### 1. 題材の目標

- 音楽への関心・意欲・態度 : いろいろな日本の音階の響きに興味・関心をもち、進んで演奏したり、ふしづくりを楽しんだりする。
- 音楽表現の技能 : いくつかのリズムや音を組み合わせる簡単なふしをつくることができる。  
手拍子や楽器などを使い、つくったふしを拍の流れにのって演奏することができる。
- 音楽表現の創意工夫 : 日本の音階の響きが生み出す雰囲気のよさや面白さ・違いを感じ取りながら、どのような感じの音楽にしたいか思いや意図をもつ。
- 異文化間 : 友達とのコミュニケーションを通して、いろいろな日本の音階の響きが生み出す雰囲気のよさや面白さについて見方や考え方を広げる。

### 2. 題材について

#### (1) 教科の視点から

グローバル化の時代において、日本の音楽文化に関心を持ち、自信をもって表現できること、世界の様々な音楽についてよさや面白さを見つけ、いろいろな感じ方を認められることの2つが大切ではないかと考えた。低学年のうちから世界の様々な音楽や日本の音楽に実際に触れ、考えさせたり気づかせたりすることを大事にしていきたいと考え、本実践では日本の音階に着目して授業を行った。

#### (2) 異文化間教育の視点から

話し合いを重ねることで、自分とは違う考え方にも価値があることに気付いたり、自分の思いや意図を伝えたりする姿勢が身に付いていくであろうという理論のもと、音楽科でも話し合いを通していろいろな音楽に対する感じ方や考え方を広げる姿勢を育んでいく。この理論をもとにした実践を通して、異なる音楽文化に対して、受容する考え方ができることを期待して実践を行った。最終的には、様々な世界各地の音楽について、違いやよさ、面白さを見つける姿や、自分なりの感じ方をもつ姿を狙いたいと考えた。

#### ① ステップ1 <異なる文化があることを知る>

いろいろな日本の音階の響きを感じて自分の思いをもち、友達の思いについて知る。

#### ② ステップ2 <異文化の間に立って、悩んだり葛藤したりする>

日本の音階が生み出す響きに対する自分の思いと、友達の思いの間で葛藤する。

#### ③ ステップ3 <自分なりの考えをもち、行動しようとする>

グループで1つの音楽をつくるために、どの音階でつくるかを話し合い、決定する。

### 3. 児童の実態

#### (1) 教科の視点から

日本の音楽については、2年生のときに和太鼓の学習を行った。その学習の中で、世界にはさまざまな音楽があり、日本には昔から伝わる伝統的な音楽があるということを学んできた子どもたちである。日本の音楽に対して、普段教科書で学んでいる音楽とは、また違った響きがあることは何となく感じているようである。本実践を通して、さまざまな音楽の良さを感じられるようにしていきたい。

#### (2) 異文化間教育の視点から

これまで、他の教科領域や学級活動などにおいて、話し合いの場面を多く経験している子どもたちである。その中で、自分や友達の意見を公平に判断する経験をたくさん積んできている。児童の声の中には「どっちもいいなあ」や「今、僕は真ん中だな」といったつぶやきがよく聞かれるようになってきたようである。音楽科においては、一人ひとりの思いや意図を大切にしながら、他教科で育んできた話し合いの経験を生かし、みんなで一つの結論を出す話し合いの活動を通して、いろいろな音楽に対する考え方を広げることを目指していきたい。

### 4. 学習の実際（全7時間）

学習活動		【評価】・教師の働きかけ
第1次 リズムを組み合わせて演奏しよう（1時間）		
1	<div>8つのリズムカードから組み合わせを考えてふしづくりをしよう</div> <p>○リズムカードを組み合わせて、一人2小節のリズムをつくった（個人）。</p>	<p>【表現の技能（ワークシート）】</p> <p>いくつかのリズムを組み合わせて、簡単なふしをつくることことができる。</p>
第2次 いろいろな日本の音階に親しもう（3時間）		
2	<div>いろいろな日本の音階の響きをくらべて聴こう</div> <p>○前時に個人でつくったふしを、グループで1つにつなげて、8小節のふしをつくった。</p> <p>○出来上がったふしを手拍子で打って練習した。</p>	<p>・まとまりのあるふしになるように、始まる感じと終わる感じを意識させた。</p>
3	<div>ステップ1</div> <p>○いろいろな日本の音階の響きを比べ、感じや雰囲気の違いをワークシートにまとめた。</p> <p>★<u>サクラ風（都節音階）ミファラシドミ</u></p> <p>★<u>ハイビスカス風（琉球音階）ドミファソシド</u></p> <p>★<u>ジャズミン風（律音階）レミソラシレ</u></p>	<div>この部分は公開に適さないため掲載できません。</div> <p>【異文化間・音楽への関心・意欲・態度（観察・聴取・ワークシート）】</p> <p>それぞれの音階の響きを比較し、雰囲気の違いやよさ、面白さを感じ取っているか。</p>

4	○つくったふしの前半部分に、民謡音階の5音から音を選んでつけた。	この部分は 公開に適さないため 掲載できません。
第3次 グループのふしを発表しよう (3時間)		
5 (本時)	ステップ2～3 グループでつくったリズムを何風にするか決めて発表しよう ○前時にまとめたワークシートをもとに、感じ取ったことや受け取った印象を確認した。	【異文化間・音楽への意欲・関心・態度 (発言内容)】 何風にするかについて、選んだ音階の響きのよさや面白さを相手に伝えながら自分の考えを主張したり、相手の考えを聞いたりしながら話し合っている。
	○何風の音階の響きで作りたいのか、その理由を含めて発表し、グループで1つに決める話し合いをした。	この部分は 公開に適さないため 掲載できません。
	ステップ3 ○前時にグループで決定した音階の音をつけ、ふしを完成させた。 ○完成したふしを、鉄琴と木琴で演奏する練習をした	【表現の技能(観察)】 つくったふしを拍の流れにのって演奏することができる。
7	○グループごとに、つくったふしを鉄琴と木琴で発表した。	・発表したふしは、グループみんなの思いが加わったものであり、どの音階にも違ったよさや面白さがあるという感じ方の変容に気づかせた。

## 5. 考察

### (1) 成果

課題設定と話し合いによる児童の考え方の変化について

児童は自分の考えをもった時に、すでに他の音階の響きとよく聴きくらべて決めた結果だったようである。自分の考え(自文化)から抜け出せないままの児童が多かった。また、自分の意見をよく言う子の意見が通っていた。良いと思う音階とその理由を手を挙げて話している場面で、目配せをして渋々意見を変えてしまう子がいたので、音楽科では「1つに決めよう」という課題を設定し、葛藤させるということが「異文化間に立つ」につながる有効な手立てとは言えないことが分かった。

### (2) 課題

研究のテーマに沿い「異文化間に立つ」「異なる2つの考えの間で葛藤する」「1つに決める話し合い」という課題を、実践の中に意識的に組みこんだ。しかし、「自分の感じ方もいいし友達の感じ方も分かる。けれどもやっぱり、この響きがいいと思うからこれにしたい。」という児童が多くいたように思う。つまり、さまざまな響きの良さは感じつつも、それを変えるには至らない児童が多くいた。

「1つに決める話し合い」や「葛藤」は、異文化間に立つための1つの方法であると思うが、音楽

科においては、必ずしも有効にはたらくとは言えないと本実践を通して感じた。今後の研究においては、様々な音楽の感じ方や、響きの良さを感じつつ、異文化間に立つ手立てを模索していきたい。